
王と王妃の婚姻契約

澤野アイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王と王妃の婚姻契約

【Nコード】

N13300

【作者名】

澤野アイ

【あらすじ】

サイアス王は苦悩していた。この度娶った王妃と交わした「婚姻契約」。ああ、なぜこんな契約を交わしてしまったのか。王は今日も胃薬を飲む。麗しい王妃と、美しい寵姫、そしてヘタレな王の「めでたしめでたし」で終わるには少しばかり情けない物語り。

00 プロローグ（前書き）

本編内に男同士のカップルが登場しますが、内容には全く関係ありません。

00 プロローグ

昔々あるところに、ジグジア国という大国がありました。
ある時の王様が、同盟の証として小国のお姫様を娶るこ
とになりました。

けれど王様にはすでに、とっても愛している大切な女性
がいたのです。

え？ なんだって？

ああ、そうさ。これは誰もが知ってるサイアス王のお話
だよ。

知ってるから他のお話がいいって？

でもね、僕のお話は一味違うのさ。

君たちがお母さんから聞いた、甘ったるいおとぎ話じゃ

あないよ。

もつともつと、馬鹿馬鹿しくて面白いお話しさ。

さて、じゃあ気を取り直してもう一度。

昔々あるところに――――

00 プロローグ（後書き）

初めての投稿で右も左もわからない状況ですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

01 王の苦悩

? サイアス王の悩みは恐らく、大陸一といわれるスニ溪谷より深い。

? 執務中も、食事中も、鍛錬中も、寵姫と共にいるときでさえ心ここにあらずだ。

? 今までに無い様子に、お仕えする者たちは医者だ薬だと大騒ぎ。
? 食事にはいつそうの気が配られ、朝晩には医者診察、寵姫も心を込めて慰め続けた。

? しかし、いつこうに王の悩みは晴れず深くなるばかり。

?

? そんなある日、王妃から見舞いの品が届いた。

? 王は喜んで見舞いを受け取ったが、添えられた手紙を見て、とうとうパタリと倒れてしまった。

?

? 王の側近エドワードは、不敬と知りつつも寝台横に投げ捨てられた王妃からの手紙を拾い上げる。

? ほんのりと甘い香りが焚きしめられ、女性らしく丁寧な文字で短くこうあった。

? 『お加減はいかがですか。お疲れが溜まっているのでしたら、ご寵姫さまと避暑にでも行かれてはいかがでしょう。留守は万事お任せ下さいませ』

? 美辞麗句、媚び、必要以上の気遣いすら無い、王妃らしい簡潔な手紙だ。

? エドワードは、王の悩みも倒れた理由も瞬時に理解した。

? 彼は幼少の頃より常に王の側にあつて、視線ひとつでその意を

汲む。

？心よりの忠誠を誓い、誠心誠意仕え、王の悩みとあらばこの命を賭してでも払拭したい所存である。

？しかし、この悩みはいささか難しい。

？何故なら、全ては王の自業自得であらせられるからだ。

？サイアス王は悩んでいた。

？書類の内容も頭に入らず、どれほど豪華な食事も味わえず、鍛錬では十代の新兵に打ち負かされ、寵姫を愛でる気にもならないほど悩み抜いていた。

？それでも何とか執務をこなしていたのだが、とうとう王妃からの見舞いの品を受け取ると倒れてしまった。

？良い年をした男が、それも一国の王が、このような悩みで倒れるなど笑止千万だ。

？おまけに、こんな状況を作り上げたのは他ならぬ自分である。情けないことこの上ない。

？気怠い体をどうにか起こし、王妃から贈られたお茶を飲んでみた。

？王妃の生国でしか取れぬ貴重なこのお茶には、疲労回復の効果があるらしい。

？濃い紅色の茶からは異国の甘い香りがし、まろやかな舌触りは極上だ。

？馴染みのない異国の味は、王妃の姿を思い起こさせる。

？この国の王妃となっても、異国の香りを漂わせる麗しい姿を思い出し、身悶えた。

？諸悪の根源でる契約書をいつそのこと破り捨てて燃やしてしまいたい。

？ああ、なぜあのような契約を交わしてしまったのか。今さらながら後悔しきりである。

？王は、王妃に恋をしていた。

？実る見込みの無い絶望的な恋が、彼を蝕んでいるのである。

王は再び自己嫌悪で具合が悪くなり、キリキリと痛む腹を抱え寝台に倒れふした。

01 王の苦悩（後書き）

機能を理解しておらず、すごく手間取りました。
試行錯誤です。

02 王の契約書

『ジグジア国王とユパーナ国第十三王女との婚姻契約書』
？

- ・この婚姻は両国の同盟強化の証である。よって愛は不要とする。
- ・夫婦はお互いの私生活に干渉することを禁ず。
- ・公私を分け、公では良好な夫婦関係を演じること。
- ・妻が望むならば夫はある程度妻の元へ通い世継誕生に努める。
- ・この契約書に署名するならば、王妃の地位待遇と金献上量の減量を約束する。

上記の契約書を引っ下げ、サイアス王は輿入れしたばかりの王妃の居室へと乗り込んだ。

ベールで顔を覆った王妃は、突然の王の来訪にやや戸惑った様子である。

しかし、王が挑戦的な仕草で契約書を突きつけると、素直に契約書を手に取った。

王には、身分低い侍女であつたために、妃に上げられずにいた長年の恋人がいる。

側室にすることすら許されず、ならばと片っ端から縁談を跳ね除け続けこの年齢まで独身で通してきた。

ところがとうとう「いい加減に妃を娶って世継を」と泣き出した臣下たちを丸めこみ。この度異国の姫を王妃として娶ることで、

恋人を寵姫として召し上げることが力技で認めさせたのだった。

彼は生涯に渡り寵姫しか愛さず、また愛せないという強い自信があった。

そうして考え出した結果が、この契約書である。

？王妃の生国ユパーナは、金山を抱えるだけの小国だ。国土の大部分は砂に埋もれ、気候も厳しい。

しかし周りを囲む列強諸国にとっては金山は喉から手が出るほど魅力的な宝だ。

常に国境線でジグジアと睨みあっていたユパーナは、ついにこの度ジグジアの強大な軍事力の庇護下に入り、属国と相なったのであった。

？

？王が求めるのは、彼と寵姫の穏やかな生活を脅かさない、分をわきまえた王妃だ。

？王は、丁寧に契約書に目を通す王妃を静かに観察した。

ユパーナでは女性は常にベールを被り家族以外のものに素顔をさらすことはない。

その憤み深いベールで隠され、王妃の表情を窺うことは出来ない。しかし、王族であれば正しく政略結婚の意味を理解しているであろうし、悪い条件ではない。

まして属国からの貢物の王妃だ。聡明であるならば、否を唱えるはずがない。

「つまり、陛下の愛する方はご寵姫さまだひとり。私との間に愛は存在せず、公の場でそれらしく振る舞えば、私の自由を認め、地位待遇や金献上量の減量までお約束して下さると。そういうことで

よろしいでしょうか」

愛らしい声でゆっくりと確認すると、ぴたりと押し黙る。この王妃は思ったよりも聡明なようだ。

ところが、満足気にうなづく王の後ろでエドワードは青冷めていた。

まさか王がこのような契約書を作っているなどとは想像もしていなかったのだ。

さらに追い討ちをかけるように、王妃の侍女のが凄まじい殺気をこちらに向け威嚇している。ベールの下から牙でも飛び出しそうな勢いだ。

「ああ。どうだ、悪い話では無いと思うが」

王妃は背筋を伸ばし、真っ直ぐに王を向いている。

「はい。大変素晴らしい契約ですね。さっそく署名したいのですが、よろしいでしょうか？そのあなた、ペンを下さいな」

ためらうこともなく、弾むような王妃の言葉に、エドワードと侍女を始め、王までもが呆気に取られたように固まった。

「お、王妃さま。その、非常に突飛で不躰な申し出ですが、誠によろしいので……？」

思わずエドワードがおずおずと口を挟む。

「そうですね、姫さま。こんな人を馬鹿にした話がありますか！」

王妃の耳元で囁く侍女の声もうわずり丸聞こえだ。

聡明であれば、必ず署名するだろう。しかし一国の姫としての誇りがあるならば、自尊心を傷つけられ憤慨するはずだ。

まさかこうもあっさり、しかも嬉々として承諾されてしまうとは

予想外である。

「もちろんです。喜んでお受けいたしますわ。ありがとうございます」

慌てて用意されたペンで手早く署名を済ませると、王妃はおもむろに自らのベールを脱ぎ去った。

「改めてまして、シェイラ・アル・ユパーナでございます。サイアス王陛下、これからよしなにお願いたします。そうですね、出来れば良き友人のような関係で」

王妃は亜麻色の髪を揺らし、にっこりと微笑んだ。

「あ、ああ。私はサイアス・リイン・ユシア・ジグジアだ。こちらこそ、よろしく頼む」

間抜けにも口をぽかんと開けたまま、名を返すのがやっとだった。王妃はますます笑みを濃くする。そうすると、涼やかな目尻がわずかに下がり、口元には笑窪が出来た。

な、なんだこれはっ。

王は突然襲われた動悸に驚き、心臓を押さえた。

沸騰したように血が逆流し、指先からしびれていくようだ。

ちよつと待て。ユパーナの民といえば褐色の肌と髪だろう。

なんだ、あの蜜を溶かしたような黄金色の肌は！

おまけに、あの目と笑窪は反則だろう、たまらんど。

ああ、あの柔らかな肌に余すことなく口づけ、無理やり組み敷いてしまいたい！！

「陛下？」

エドワードの呼びかけに、王ははっと正気に返った。

俺は、今なにを……。いかんいかん、危うく持っていかれるところだったぞ。

「そろそろ失礼しよう。ゆっくり休んでれ」

王は体にこもる熱を抑えこみ、足早に王妃の居室を後にした。

この日、めでたく王と王妃の婚姻契約は成立した。
けれども、まだまだ「めでたしめでたし」とはいかないようで…
…むしろこの日から、王の苦悩は始まったのである。
？

02 王の契約書（後書き）

王さま性格悪いかんじですが
彼が悪いんじゃないんです
そういう風に育てられちゃったんですよー
哀れ

03 王妃の素晴らしき結婚生活

砂漠の国ユパーナから、大国ジグジアに嫁ぎ早半年。王妃の結婚生活はこれ以上ないほど充実している。

王妃とはいえ所詮は属国の姫に、ジグジア国内ではこの婚姻に反発や疑問視する声も多い。

その上、もし両国の関係がこじれたならば命すら危つい立場だ。悲痛な覚悟で嫁いだ王妃だが、待ち受けていたのは、予想もしていなかった王からの『婚姻契約』の提案だった。

考えるまでもなく、二つ返事で受け入れた。ユパーナ国からただひとり伴った侍女のサーナは、

「こんな男に都合の良い契約がありますかっ！ 姫さまを馬鹿にしていますわ！！」

と怒り心頭で喚いていたが、王妃には自らに都合の良い契約に思えてならなかった。

私生活に干渉されないので、自由に友人を作ることが出来、趣味に興じてても何を言われることもない。

公で仲の良い夫婦を演じることなど造作もなく、王妃が望まぬ限り体の関係を結ぶ必要もないとは、何と素晴らしい話だろう。

それなのに、王妃としての地位待遇は保証され、献上金の減量まで約束してくれているのだ。

「私の姫さまはこんなにもお美しいのに、蔑ろにされて黙ってはおれませんかっ」

実際、王は寵姫の元で生活を送っている。決まった日にしか王妃

を訪れないので「冷遇される王妃」と皆には認識されていた。

ゆえに蔑みの声も届くが、栓無きことと諦めてしまえば、さして気にもならなくなった。

何より、王妃は王を好ましく思っている。

寵姫への愛を貫く、誠実で素晴らしいお方だ。高圧的なところはあるが、常に良い友人のように接してくれているし、申し訳ないほど気遣ってもらっている。

王が苦悩しすぎて倒れたその日。王妃は友人を居室に招き、午後のお茶を楽しんでいた。

「うーわー何だこれ、すっげ美味いつすよ王妃。何入れたんすか、何使ったらこんな深い味わいとコクが出るんすか。不思議な味、でもチーズの風味を少しも邪魔してない。むしろ相乗効果で至高の味に近づいている……っ」

リッツ・ハルマンは大げさに天を仰いで髪を掻きむしった。

「だぁーだめだっ。分かんねっ、降参！」

「もう降参ですか？実は、ほんの少し煮出したお茶で風味を付けただけなのですよ。もう一口食べてみて下さいな」

お茶？！

リッツは一口食べて、再び唸った。ここ最近、王妃には負けてばかりだ。今日のチーズケーキも文句なく美味い。

「そう簡単には負けられません。なんとと言っても王宮専属菓子職人との合作ですから」

晴れやかに笑う王妃の顔は、子供のように輝いている。

「ずりーっすよ、それ」

リッツは王妃の大切な友人のひとりである。財務省の役人の彼とは、趣味のお菓子作りを通じて知り合った。

砕けた態度で、率直な言葉をくれるリッツは大切な友人だ。

「そういえば、タキスはまだ戻らないのですか？　確か、十日ほど戻ると」

王妃は軍務で北方領視察へ向かったもうひとりの友人のことを思い出した。

「はい。ちよつと天候がおもわしくなくいらしくて。山間部で手間取ってるらしいです。でも明後日には帰って来ますよ」

「そう、寂しいですね。ね、リッツ」

うふふ、と王妃が含みのある視線を向ければ、リッツはたちまち耳まで赤くして俯いてしまった。

幼馴染のリッツとタキスは、まあなんと言おうか、からかうと可愛らしく赤面してしまうような仲なのだ。

「これ、陛下にもお届けしようと思うのですが、どうでしょう？」

王はあまり甘いものを好まない。だが今日のチーズケーキならば甘すぎず王の口にも合うと思うのだ。

「それは喜ばれますよ。最近体調悪そうっすからね」

王宮では周知の事実を、リッツはさらりと口にした。当然知っていると思っていたのだが、王妃は知らなかったらしい。

ひどく驚いた様子の王妃に、リッツは「マズイことしたかな……」とそそくさと退室してしまった。

本当は、真つ黒な笑顔のサーナに「余計なことをしてくれて、ありがとっございますわ」と蹴り出されたのだが。

王妃はすぐに見舞いの品と手紙を届けさせた。

お見舞いがてら自ら届けようかと思つたが、サーナに「ご寵姫さまが付いておられると思いますわ」と言われ、でしゃばった真似を

するところだったと反省した。

王妃は本当に、王に深い感謝を捧げている。

この充実した日々をくれたことへ、ほんの少しでも恩返しがしたくて、離宮への避暑を勧めた。自分に何が出来るとも思えないが、王の数日の留守くらい守ってみせよう。

しかしその手紙によって、とうとう王が倒れたことなど、王妃は知るよしもなかったのだった。

03 王妃の素晴らしき結婚生活（後書き）

リッツとタキスはラブラブです。

王妃さまはいつまでも当てられっぱなし。

04 王の純情

サイアス王は足取りも軽く王妃の居室へと向かっていた。手には王妃の好む焼き菓子の箱を持っている。

今日は王妃と会う約束はしていないのだが、見舞いのお礼という立派すぎる理由があるのだ！

頑張れ自分、攻めるのだ自分、王は意気揚々と王妃の元へと向かった。

しかし、王妃の居室から見知った顔が出てくるのを見て、浮き立っていた気持ちは一気に萎んでしまった。

あれは……タキス・バツケンレー大尉。

王の脳内でタキスの情報が素早く取り出される。

王は、こちらに気づき伸びやかな動作で膝を折る男を冷やかに見つめた。

タキスは、王妃の愛人と噂される男のひとりだ。

見上げるような長身に、鍛え上げられた厚い胸板。太い首の上に乗った顔は無骨さが目立つが、柔らかく弧を描く目や口元が人好きする印象を与えている。

貴族出身の武勲華やかな功績を持つこの男は、女性人気も高かったはずだ。

？

おそらく北方領から帰還したその足で王妃に会いに来たのだろう。そつえば、奇跡的に天候が回復し一日早く帰還したと報告が上がっていた。

敵の動向は抜かりなく把握している王である。

ちつ。いつそそのまま雨に流されてしまえば良かったものを。

誰が声などかけるものか。

王はタキスを無視し、素早く王妃の居室へと滑りこんだ。扉を閉め、気を落ち着けるために大きく息を吸う。

「タキス、何か忘れ物でもしまし……まあ陛下？」

扉に背を向けていた王妃が慌てて立ち上がった。

「驚きました。もうお加減はよろしいのですか？」

王妃は結婚後、ベールは被らず常に素顔をさらしている。

公の場以外では生国の習慣で生活しても良いと考えていた王は、「私ももうジグジア国民ですから」の一言で完全にベールを取り去ってしまった王妃に驚嘆したものだ。

褐色の肌と髪が普通のユパーナの民には珍しい黄金色の肌と亜麻色の髪は、母君が西方人のためらしい。

やや緊張している王の正面に腰かける王妃は、相変わらず麗しかった。

「一日休んだら楽になった。心配をかけたな」

はあ。なぜ俺はもっと気のきいたことが言えないのか。他に言うべきことが、伝えたいことがあるだろう。ままならぬ己の口が不甲斐ない。

「よろしいですよ、そのようなこと。陛下が健やかでなくては国は立ち行きません」

ふふふ、と愛らしい口の端が上がる。

その艶やかな唇を凝視していた王は、慌てて視線をそらし、手に持ったままだった焼き菓子の箱を思い出した。

「昨日の茶が効いたようだ。これはジグジアの伝統的な焼き菓子で、今では作れる者もいなくなり、レシピも失われつつあるらしい」

途端に王妃の目が輝き、目尻がへにゃっと下がる。

「まあ！ 文献では読んだことがあります。数少ない作り手も皆ご高齢のはず。そのような伝説の焼き菓子をいただいてよろしいのですか？！」

王妃の甘党ぶりは凄まじいものだ。宝飾品や流行の衣装などには欠片も興味がないらしい。

結婚当初、若い女性なら当然喜ぶだろうと用意した贈り物はことごとく撃沈し、悪戦苦闘の末やけっぱちで贈った異国の菓子に手を叩いて喜んでみせた。

その時は、「一緒にいただいてくれませんか？」とお茶の誘いがあつたほどだ。

それ以来、王妃への贈り物は必ず甘い菓子と決めている。

「王妃のために用意した物だ」

この笑顔を見るためならば、影の諜報機関を総動員し、たかが老人を探すことぐらい何でもない。

「本当にありがとうございます。本当に嬉しいです。でも……」
輝く笑顔のまま、王妃はこう続けた。

「でも私ひとりで独占してしまうのはもったいないですので、リッツとタキスと大切にいただきますね。きっと二人とも喜びます」

王のほのかな期待は、ガラガラと大きな音を立て、崩れ去った。
泣きたい。

「ぶっ、くくくっ」

思わず吹き出してしまった王妃の侍女は、慌てて無表情を装った。

『夫婦はお互いの私生活に干渉することを禁ずる』

この条項のせいで、王は王妃の私生活に干渉することが出来ない。リッツ・ハルマンとタキス・バッケンレーとはどういう関係なのだ？！まさか、噂通り愛人などと言うのではあるまいな？！

王妃の華奢な肩を押さえつけ、問いただしたい。しかし、口が裂けてもそんなことは出来ない。

ああ、なぜ俺はこんな条項を契約に入れたのだ！！

こうして、今日も見事な黒星を飾った王は、なぜか必死に笑いをこらえている侍女に見送られ、憔悴した様子で自室へと帰って行ったのだった。

いかな、また胃の調子が……

04 王の純情（後書き）

伝説の焼き菓子……

おそらく、後継者不足で技が失われて行く

伝統工芸みたいなものかと……

05 王妃の素敵な仲間たち

「ボロボロこぼすな、子供かお前は」

タキスはリッツの膝上に落ちるパイのクズを見て、思わず手を伸ばした。

「ばっ、誰が子供じゃ！つか、王妃の前っ」

ナプキンを膝に広げてやり、口元についたクズを親指の腹でそつと拭ってやる。あまつさえ、その指をペロリと舐めたタキスに、リッツは耐えきれず声を上げた。

「ん、ああ」

目の前の王妃の存在をすっかり忘れていたタキスは、とりあえず生返事を返す。今度はリッツのパイを食べやすいよう一口大の大きさに切り分けてやっていて忙しいのだ。

「申し訳ありません。つい……」

悪びれもしないタキスに、王妃はにつこりと微笑んだ。

「気にすることはありませんよ。ただ、あまりに仲が良すぎて、少し照れてしまいますけど」

王妃は困ったように、リッツから視線をそらす。その後ろで、ニヤリと嫌な笑顔を浮かべたサーナが、おもむろに首筋に手をやった。リッツはその意味を理解した瞬間、顔を真っ赤にし髪を掻きむしった。

「王妃っ！そんなこと言わないで下さいよ。ここはガツつと目の前でイチャつかれるのは不快だってはっきり言って下さいよ！！もう、本当すんません。恥ずい真似してすんません。お前も馬鹿だろう！そーゆーことは二人っきりの時以外すんなって言うてんだろ。しかも、目立つとこに跡つけんなってあれほど！！あー穴があつたら入りてーつかお前を突き落としてー」

フォークを握りしめたまま立ち上がり吠えるリッツを、王妃はまあまあと宥め座らせた。

ちなみに、その口元はしっかりと扇で隠されている。

この東屋は、庭園の奥に位置し人の出入りは少ないが、いつ誰が聞いているか分からないのだ。

そろそろ夏も終わрикаという頃。今日は珍しくリッツとタキスが連れ立ち、王妃の元を訪れていた。

気分を変え、散歩がてらこの東屋でお茶をしていたのだが、彼ら二人がそろつと、途端に賑やかになる。

「雨」

王妃はポツポツと降り出した空を見上げ、眉根を寄せた。

「明日は降らずにいてくれると嬉しいのですけど」

「あ、明日つすかお出かけ。そしたら俺、城下の美味いもんリスト作るつすよ」

「お出かけ？」

「城下の孤児院と病院をいくつか訪問する予定なんです。子供たちと外で遊びたいので、晴れてくれるといいのですが」

実は、王妃も毎日お菓子ばかり食べているわけではない。慰問や謁見など、割り当てられた公務はきちんとこなしているのだ。

空を見上げていた顔を戻すと、難しい顔しているタキスと目が合い、苦笑した。

おそらくタキスは、王妃への風当たりが強い中、公務とはいえ城下に下りることを案じてくれているのだろう。

しかし今回の慰問は、しづる王に無理やり頼みこみ、王妃自ら組んでもらった予定だった。

王妃がジグジアに嫁ぎ、両国の国交は目に見えて盛んになった。最近では、ジグジアの街でも褐色の肌を持つ芸人や商人、旅行者の姿も珍しくはない。

しかし、未だ異なる色彩を持つ彼らを犬猿する者がいることも事実だ。

私が外に出て姿をさらすことで、民同士の交流をもっと活発に出来たなら……

「それはお出かけではなく公務だ」

「一緒じゃん」

「全く違うだろ」

再びじゃれ合いを始めた二人を、王妃は微笑ましく見つめる。性別、身分、肌の色、宗教。全てが違うジグジア人の彼らと、こんなにも親しくなることが出来たのだ。

私も、もつと民族の垣根を越え、たくさんの人と親しくなりたい。国民にもそうあって欲しい。

それは遠い未来だとしても、決して不可能ではないだろう。

その夜。就寝の挨拶をするサーナに、王妃が甘えるように抱きついた。

これは、王妃の癖だった。何かあると、こうして生まれた時から側にいてくれるサーナに頼ってしまう。

いくつか年上のサーナは世慣れていて、今までもらった助言に間違ったことはひとつもないと信じている王妃だ。

「ねえサーナ。私、王妃となったらもつと辛いことばかりと思って

いました。けれど、良き友人に恵まれ、サーナも変わらず側にいてくれています。とても幸せ……ですが」

「姫さま」

子供の頃したように背をさすりながら、サーナはにじむ涙をそつと拭う。

毎日を楽しんでいる王妃に、一番安堵しているのはサーナだ。王の契約書には憤死しそうなほど頭にきたが、今では良かったと思っている。

リッツとタキスについても同様で、毒の無い彼らをサーナは割と気に入っていた。何より、からかいがいのある美味しい連中だ。

「ですから、サーナなおりって相談があるのです」

王妃は可愛らしい仕草で、サーナの耳元に顔を近付けた。

それから数日後、王妃は見事な爆弾を落としてみせた。それにより、サイアス王の胃痛はとうとう不治の病となったほどの、破壊力抜群の爆弾である。

05 王妃の素敵な仲間たち（後書き）

リッツは良くキスマークをつけています。
王妃さまはいつも黙って視線をそらします。
そしてタキスはお仕置きを……

06 王と王妃と寵姫の関係

副宰相は肥満気味の体を揺らし、「本日の午前中分の報告は以上です」と締めくくった。

可決、保留、却下。

サイアス王は報告を受けながら、その手は休むことなく凄まじい早さで書類をさばいている。

副宰相が持ちこんだ書類は、報告を終えるまでの短い時間に全て分類し終えてしまった。

「分かった、西街道の整備と盗賊被害については即刻検討しよう。国土交通省、財務省、軍の担当者を集めておけ。次にリダ国大使の訪問日程だが、我が国の豊穰祭に合わせてもらえるよう調整しろ。王宮で舞踏会もある、ちようど良いだろう。それから、ホラスト元大臣は追い返せ。あ、この保留分の書類を忘れるなよ。各省に戻し、調査書を提出させる」

「かしこまりました。しかし、ホラスト元大臣にはお会いにならないくてよろしいので？」

副宰相は、取次の間で「陛下に会わせろ」と怒鳴り散らす男を思い出し眉をしかめた。

しかし王は、それ以上に不快感に顔を歪め、却下にした書類をぐしゃぐしゃと握り潰している。

「時間の無駄だ。あいつめ、新しい妃などいらぬと言っているのに、恐ろしくしつこい。絶対通してくれるなよ！」

事情を理解した彼は、ホラスト元大臣の押しの強さに疲れきって

いる王を気の毒に思った。

しかし、あわよくば己の息のかかった娘を王宮に上げようと企む貴族は、ホラスト元大臣だけではない。

多くの貴族たちは機会を窺い、隙を狙い、様々な手で王に新しい妃を娶らせようとするだろう。

何しろ現在の妃は、属国の王妃と、侍女上がりの寵姫だ。あまりに後ろ盾が弱く、力が無い。

その上、王にはまだ世継ぎがない。

シェイラ王妃を側室に降格させ、他国の姫君を王妃に迎える方が良いのではないか、と考える役人も多い。
そのような状態では、強欲な貴族たちが何かを期待してしまうのも仕方のないことなのだ。

その夜。政務を終え寵姫の元へ戻った王を迎えたのは、困惑した寵姫と、やけに興奮している侍女たちであった。

差し出された盆の上には、王と寵姫宛の手紙が一通ずつ。

なんと、先ほど王妃から届けられたのだという。

今までに無いことに、王は何事かと慌てて手紙を読み、目を見開いた。

『アンリエッタさま。突然のお誘いで申し訳ありません。つきましては明日の午後、私のお茶会にご主席いただけないでしょうか。私的なお誘いですので、どうぞお氣を楽にして、普段通りでいらして下さいませ。 シェイラ』

こちらは寵姫宛の手紙だったようだ。そこには丁寧な文章で、お

茶への誘いがしたためられている。

な、なんだと?!

慌てて、もう一通にも目を通した。?

『明日の午後、ご寵姫さまをお茶にお誘いしたのですが、よろしいでしょうか?』

相変わらず素っ気ないほど簡潔だ。余分は全て省略され、要件のみ、王への挨拶すら無い。

王は力無く長椅子に座りこんだ。

「あの、陛下……王妃さまはご本気で?」

朝露に濡れた鈴蘭のごとき清楚な美貌の寵姫が、そつと王に寄り添い腰をおろす。その瞳は不安気に揺れている。

「本気だろう。王妃はたいそうな甘党で、趣味が菓子作りだ。振る舞いたいのだと思うぞ」

寵姫はこくりと頷き、王の夕餉を整えている侍女たちを困った様子で見上げた。

「大丈夫ですアンリエッタさま! 私たちがついております!! 負けではありません!!」

すっかり臨戦体制の侍女たちは、力強く拳をかかげてみせる。

「言われた通り普段着で行ったりしたら、きつと笑い者になってしまいます! 明日はこれでもかかってくらい、気飾りましょう!!」

「そうです! イヤミを言われたら、ニッコリ笑って陛下のホクロの場所を教えて差し上げればいいんです!!」

「その通り! アンリエッタさまは悲劇のヒロインなのです! 大丈夫、最後には勝ちます!!」

侍女たちは、すっかり王妃の誘いを寵姫に対する挑戦状と受け取っている。

何やら声高に叫び、愉快なポーズを決めてみせる侍女三人。

王の前で、とんでもないことを口にする侍女たちを、寵姫は才口と黙らせた。

「もうあなたたち、いい加減になさい。王宮ロマンス小説の読み過ぎよ！」

寵姫が気兼ねなく過ごせるようにと、明るい気性の者ばかりを選んだのは間違いだったのだろうか。

寵姫アンリエッタは慎ましく控えめで、まるで奢ったところのない女性だ。何しろ、王と長年恋人関係にありながら、周囲の者に一切悟らせなかったほどの慎み深さである。

王が一目惚れしたその儂げな美貌は、最近ますます磨き上げられ、眩しいほどだ。今やアンリエッタの名は国中に知れ渡っていた。

寵姫は没落した下級貴族の娘である。

家族のために下働きとして王宮に入り、王の侍女にまで出世した苦勞人だ。

美貌・教養・品格も素晴らしく、どこに出しても見劣ることはない。

未だに侍女気質が抜けず、いらぬ働きをしようとするところが欠点といえば欠点だ。

しかし、だからこそ王宮に勤めてる女性からは絶大な支持を得ていた。

「どうする、アン。気が進まぬなら断っておくぞ。王妃はそれで気を悪くする人ではない……ああ、それからお前たちも、そのように気を張らなくとも王妃に他意は無い」

侍女たちが、えーっと不満気に頬を膨らませた。

ベタベタな女の戦いを期待していたらしい。平和な証拠だ。

「いいえ、行つて来るわ。せつかくのお誘いだもの」

王は、微笑む寵姫の肩をそつと抱き寄せた。

恐らく、本当に王妃に他意は無い。純粹にお茶を楽しみ、親しくなりたいだけなのだろう。

しかし、なぜ今さらなのか。王は首を傾げた。

王と王妃は、今まで一度も寵姫の話をしたことは無かった。全く関心が無いのだろうと、悲しくなる反面 ホツとしていたのだが……何やら非常に気まずい。

王妃への恋心は誰にも知られていないはずだ。しかし、寵姫への罪悪感に、また胃が痛み出す。

しかし、王宮において王妃と側室の交流はいたって普通のこと。王は深く考えずに、胃薬を飲んだ。

この時王は、事態の深刻さを全く理解していなかった。突然足元に降ってきた爆弾を、王はその小ささに油断し素通りしてしまった。

これより以後、何度も「時を遡れるならあの時に戻りたい!」と悶絶するほどの後悔を味わうとも露知らず……

06 王と王妃と寵姫の関係（後書き）

王宮ロマンス小説

王宮に勤める女性たちの間で大流行中

実は王妃さまも愛読者

07 王妃のお茶会準備

王妃の居室は朝から何やら騒がしい。

気持ちがはやり、昨日の今日で寵姫をお茶に誘ってしまったが、よく考えれば準備が全く整っていなかった。

「ねえサーナ。クロスやカーテン、変えた方がいいかと思うの」

「えー今からですか?！」

「やっぱり、そろそろ秋なのに白と青は変です。少し秋らしく、橙で統一しましょう」

「かしこまりました! こうなったら意地ですわ。誰か、すぐにクロスとカーテンを!」

「お茶とお菓子の準備は出来ていますし、後は……」

「王妃さま、でしたらお花も変更でございますね」

「王妃さま、でしたら食器もご変更でございますね」

「ええ、そうですね。お花は温室から早咲きの秋バラを、食器は」

「ひ、姫さまっ」

「そうそう、ユパーナから持ち込んだ特別なものがあるんです。それを……」

「姫さまっ」

「どうしました? サーナ」

「いつの間にか、タキスさまが」

「まあ」

というわけで、いつの間にか長椅子にタキスが腰かけていた。所在無げに室内の様子を窺っていたタキスであるが、王妃を始め

侍女の誰一人として気づいてくれず、ガックリとうな垂れている。
リッツから頼まれた茶葉を届けに来たのだが、どうや、間が悪かったらしい。

サーナはうんざりとした表情を隠そうともしない。「こんの忙しい時間に来やがって、空気読めよ」と思っているのがダダ漏れである。

「それは、あまり良くないのでは？」

今日の午後に寵姫をお茶に誘ったことを嬉々と報告した王妃に、タキスは微妙な表情で言った。

「……何がですか？」

王妃は首を傾げる。

確かに寵姫への誘いは突然過ぎたかもしれないが、王妃と側室の交流は珍しくもない。それどころか、後宮をまとめる上では必要なことだ。

王との婚姻契約に『夫婦はお互いの私生活に干渉することを禁ず』とあるため、寵姫のことを王に伺ったことはない。しかし、王妃と側室が挨拶すら交わしたことが無い現状は問題だと思っただ。

「いや、ですから。王妃は純粹にお茶にお招きしたいのだと思いますが、あちらがどう捉えるか……」

言いにくそうに語尾を濁すタキスに、王妃はさらに首を傾げてみせる。

「ですが、サーナは賛成してくれたのですよ」

今しがた届いた秋バラを活かしているサーナに目配せをする。

「はい。陛下のお妃であるお二人が親交を深められることは、大変良いことですわ」

サーナが澄まして答えると、なぜかタキスの顔がわずかに曇った。

「私はジグジアに嫁ぎ、民族など関係無く、あなたやリッツという素晴らしい友人を得ることが出来ました。常々、もっとたくさんの方と親しくなりたいと思っていましたのです」

「しかし……」

口ごもるタキスに王妃はにっこりと微笑んだ。

「大丈夫です。ご寵姫さまはとても素晴らしい方と評判ですもの。きつと私とも親しくしてくれます」

王妃は積極的に王宮内の噂を拾うことはしないが、多くは自然と耳へと入る。

寵姫に関しての噂は、身分のことを除けば良いことばかりで驚くほどだ。

何より王が一途に愛し続けている女性である。素晴らしい方であることは疑いようもない。

サーナの賛成もあり、王妃はぜひ寵姫と親しくなりたいと、一大決心でお茶へと誘った。

しかし、タキスの言わんとしていることも理解している。

「冷遇される王妃」は、王の寵愛を一身に受ける寵姫をうとんじている。事実はどうあれ、世間ではそう思われていることは承知していた。

その王妃が、今まで交流を持たなかった寵姫をお茶に誘う。何を思われるかなど想像はたやすい。

寵姫もさぞ驚いたことだろう。

けれど、情勢の不安定なこの時期に、公のお茶会や音楽会などを開くことは避けたかった。

悪戯に人々の好奇心や敵愾心を刺激し、何が産まれるか分からない。

「お忙しい時に失礼いたしました」

タキスは渋々納得し、王妃の居室を退出すると、サーナを柱の影に引きこんだ。

一見すると、王妃の侍女と軍将校の逢引のようにはしか見えない。実際、この光景を扉の隙間から見てしまった王妃がばっちり誤解していることなど、当の二人は知るよしもない。

もちろん二人の間に甘やかな雰囲気などあるはずもなく。

黒い笑顔で牽制合戦を繰り広げていた。

「一体何を考えているんだ」

「あら、私はいつでも姫さまのことしか考えておりませんわ」

「まあ、いい。今は難しい時期だ、ほどほどにしておけ」

「本当に失礼ですわね。そちらこそ、ほどほどになさいませんと嫌われてしまいますわよ」

「何の話だ」

「最近寝不足で辛そうですわ〜お体もダルそうです〜特に腰など〜姫さまもとても心配しておられて〜」

「……っ」

「余裕、ありませんのね」

タキスはサーナが苦手だ。

07 王妃のお茶会準備（後書き）

王妃さま、脇役に食われてる……

タキスはサーナを腹黒の怖ろしい女だと思ってます。

けど、サーナはタキス気に入ってます。

08 王の胃薬（前書き）

評価をしてくれた皆様、お気に入りに登録してくれている皆様。
本当にありがとうございます。

08 王の胃薬

さて。最近サイアス王は新たな悩みに悶絶していた。もちろん、王妃と寵姫に関わることである。

王がわずかに眉をしかめると、優秀な側近エドワードは懷からさつと胃薬を差し出した。

歴代の王達に重用され続け、その歴史はジグジア国建国までさかのぼるといふ、王家の秘薬である。どんな胃痛でもたちどころに治してしまうという。

しかし、精神的な理由の胃痛は、悩みの原因を断つしか方法がない。

こればかりは、いかに優秀なエドワードにもどうすることは出来ない。

何せ、どう考えても原因は王の自業自得であらせられるのだから。

「……俺は、何かしたか？」

苦い胃薬を飲み下し、王がボソリともらす。

「毎日大量の書類を裁き、会議に明け暮れ、趣味のひとつも持たず、国政と予算のことばかり考えているというのに……俺は王だぞ、それなのに、なぜこんな胃痛なんぞに苦しまねばならんのだ」

……それは、陛下が「ご寵姫さましか愛せない」と言った舌の根も乾かぬうちに、王妃さまにヨロっといっちゃったからでしょう。

ズバッと核心をついてやるが、己の立場をわきまえるエドワードは決してそれを口に出すようなことはしない。

「陛下、胸に手を当てよく考えてみて下さい」

しかし、何も言わずにおれようか。

エドワードは誰よりも近くで王の成長を見守ってきた。

鶏をこっそり王宮に連れこみ大騒ぎになった日も、初めて恋をした日も、王となった日も。

そう、王の全てを知っていると云っても過言ではないと自負している。

王は幼少の頃より、のめりこんだら一直線。色恋にはいまいち疎く、女性に弱い。

大国の王であるのだから、妃など何人でも持てばいいのに、たった一人の女性を持て余しウジウジと、見ている方が情けない。

？そんな性格を好ましく思っているが、今回ばかりは自分で解決していただかなければと決めている。

何しろ、完全なる王の自業自得であらせられるのだから。

「お前はいつも遠回しな言い方で回りくどい。ハッキリ言え、説教の仕方がジジ臭い」

胸元をくつろげ、長椅子に転がり王は言った。

「だから未だに童貞なんだ」

「それは今は関係ございません!!」

「なんだ、本当だったのか。侍女の間で噂になってるぞ」

「な、何ですか噂とは」

王はニヤリとエドワードを見上げる。

「だから、お前はその年齢で童貞の変態……堅物だと」

「はっ?!」

「いやいやいや、気なするな。男の価値はそんなことでは決まらん。無理にでも女を紹介しなかった俺が悪い」

「あ、いえ、決して陛下のせいでは」

「案ずるな。童貞のまま死んだ男は妖精になれるらしいぞ。それも良いではないか、貴重だぞ。ははははっ」

「陛下っ」

エドワードをからかって遊んでも、王の胃痛は気紛れに治まるだけで完治することはない。

今も、胃痛の原因である人物が、キラキラと瞳を輝かせ王の前にいる。

「今度シェイラのところにお泊りに行っていいかしら？陛下、狩りで一日留守にするでしょ？その時にパジャマパーティをしましょうって話になって」

頬を桃色に染めた寵姫は、今日も鈴蘭のように美しい。

王は「もちろんだ」と頷きながらも、内心は嵐のように突風が吹き荒れていた。

王は寵姫にバレぬよう、こっそりと息を吐いた。これが胃痛にならずにおられようか。

「シェイラ、パジャマパーティしたことないんですって。おしゃべりしながら、一緒にお風呂に入って一緒に寝台で寝るの。楽しそうでしょ？シェイラってば実は寝起き悪いらしいの。そんなふうに見えないわよね」

？寵姫は王の様子には気付かず、楽しそうに話を続ける。

やれ東の庭園に共同でハーブを育てているだの、やれ有名な調香師におそろいの香水を作ってもらっただの、お忍びで歌劇を見に行っただの。

果てには俺の留守に二人でパジャマパーティだと？

もはや、悲劇に見せかけた喜劇だ。

王妃の突然のお茶の誘いから一月。その日から、寵姫の口からは王妃の名しか出てこない。

「シェイラがね」

「シェイラと一緒に」

「シェイラってば」

つまり、周囲の過剰な心配を他所に、当の二人はとてつもなく仲良くなってしまったのだ。

その急激な接近に、王宮の誰もが目を見開いている。

もはや、これは拷問だ。

恋い焦がれる王妃の話を、寵姫から聞かされ続けるとは！

王妃がハーブの知識に長けていること、花の香水を好んでいること、寝起きが悪いなんてこと知らなかった。

しかも、夫である自分ですら名を呼べずにいるというのに、アンは当たり前のように「シェイラ」と名を呼んでいる。

もはや、悪夢だ。

何も知らぬ寵姫が王妃と親しくなったことへの罪悪感。そして、自分を差し置いて王妃と親しくなった寵姫への嫉妬。

王は自分でも持て余す感情に疲れ果て、また胃薬を飲む。

それにしても、王妃と一緒に風呂に入って同じ寝台で寝るとは……なんて羨ましいんだ。俺は王妃の素肌すら見たことないというのに。

『妻が望むならば夫はある程度妻の元へ通い世継ぎ誕生に努める』この条項のせいで、王は王妃が望まぬ限り触れることが出来ない。

『妻が望むならば』などと入れなければ、義務としても肌を合わせる事が出来たかもしれない。

しかし、悲しいかな、王妃が王を望むことなど一生なさそうだ。

一応、現状は正しく理解している王である。

……一体俺はどうすればいいんだ。

サイアス王の苦悩は大陸一と言われるスニ溪谷よりも深い。

そして、その苦悩が報われる日は、まだまだ遠い。

09 王妃と寵姫の楽しい毎日（前書き）

思ったより間を開けてしまいました。

見捨てずに読んでいただけると嬉しいです。

09 王妃と寵姫の楽しい毎日

最近の王宮は、何やら華やぎ賑やかだ。

庭園から花のように色鮮やかな一行が現れると、回廊を行き交う人々は一斉に頭を垂れた。

「皆さん、どうぞ頭をお上げになって下さいな」

「私たちのことはお気になさらず、お仕事に戻られて下さい」

王宮の女主人、王妃と寵姫の言葉に、人々は「ほう」と息を飲む。美しく麗しいお二人に声をかけられれば、誰もが頬を桃色に染めてしまう。

「シェイラ、急がないと。もう仕立て屋さんいらしてるかもしれないわ」

「まあ、もうそんな時間ですか？それでは、これをお願いします」

王妃は手にしたいカゴを侍女に手渡し、事細かに指示を与える。今日は天気も良く、朝から寵姫とハーブを摘んでいたのだ。おかげで、ドレスは土まみれになってしまい、仕立て屋と会う前に着替えなければならぬ。

ジグジア国では間もなく秋の豊穰祭りが執り行われる。その期間、王宮では毎夜のように舞踏会が開かれるため、王妃と寵姫は新しいドレスを作るため仕立て屋を頼んでおいたのだ。

「そうだわ、アン。居室まで戻っていたら遅くなってしまいますから、私のドレスをお貸ししますよ？」

王妃はにっこりと笑顔を見せる。

「ええ、ありがとう。大丈夫かしら？サーナ」

寵姫は困ったようにサーナに助けを求めた。

「残念ながら、姫さまのドレスではアンリエッタさまには少々お苦しいかもしれませんわ」

王妃はきょとんと首を傾げた。一方、王妃と寵姫の侍女たちは二人を見比べ、「ああ」と納得すると静かに視線を逸らす。

民族の違いもあり、王妃はとても小柄だ。十分女性らしい曲線を持つてはいるが、それでも華奢な体はまるで少女のようだ。

とはいえ、寵姫もジグリア国の女性の平均からすると小柄な方なのだが、王妃と並ぶとその差がはつきりと出てしまう。

特に、胸の辺りの。

サーナを始め、侍女たちの視線は一点に集中している。

柔らかな布を押し上げ、形の良い丸みを主張している寵姫の胸。

そして、フリルとコサージュで誤魔化した控えめな王妃の胸。

きょとんとしていた王妃だが、侍女たちの視線を辿り、寵姫の胸を見、次いで己の胸を見た。

明らかに見劣りしている、己のそこ。

「皆さん、すこおし意地悪なわけではありませんか？ アン、あなたまでそう思っているのですか？ 酷い……」

「シエ、シエイラ。嘘よ、ちっとも思っていないわ。皆も止めなさい、すぐにシエイラに謝って」

オロオロと慰める寵姫を尻目に、侍女達は笑いを堪えながら口々に謝罪を述べた。

回廊のど真ん中で行われるやり取りを、使用人たちは微笑ましく、胸中では必死で笑いを堪えながら見守っていた。

例のお茶会から、王宮内ではこのような光景が日常となりつつあ

る。

初めは驚いた使用人たちも、今ではすっかり見慣れた光景だ。今まではお互いに遠慮し居室にこもりがちであった二人だが、最近は毎日のようにお互いの居室を行き来し、庭園を訪れ、王宮内をそぞろ歩いている。

侍女を交え楽しそうに笑い、気さくに使用人たちに声をかける二人に、王宮は活気付き、華やいだ空気を放っているのだ。

王妃の毎日は今や寵姫で溢れている。

素敵な友人と過ごす毎日は前にも増して充実し、きらきらと輝いて見えるのだ。

あのお茶会の日、寵姫はゆったりとした簡素なドレスで訪れた。髪も簡単に編んだだけで、装飾品は一切身に付けていない。

ただ、その手には可愛い可愛いマーガレットの花束を持っていた。始めはお互いに緊張していたが、王妃の作ったお菓子を一口食べた寵姫の一言から全てが変わった。

「美味しいっ。え、これ王妃さまが?! いえ、失礼いたしました」

「ふふ。出来れば、普通にお話しして下さいな」

それをきっかけに、二人は急速に親しくなった。

毎日会っているというのに、まだ話し足りない。もっと二人で素敵なことをしたい。

マーガレットの花言葉は「貞節」「誠実」……そして「真実の友情」である。

王妃はすっかり、言葉では表せないほど、寵姫のことが大好きなのだ。

「ドレスありがとう。すぐに返すわね」

仕立て屋との打ち合わせを終えた王妃の居室で、寵姫が帰り支度を始めた。

「いえ、いいですよ。私には見頃が合いませんし、よろしければもらって下さい。ね、サーナ？」

「ええ、良くお似合いですわ。アンリエッタさま」
気を良くした寵姫がくりと回ってみせる。

クリーム色の繊細なレースをふんだんに使ったドレスは、清楚なデザインだが体の線を惜しげも無く出すもので、寵姫に良く似合っていた。

「本当にいいの？じゃあ、もらっちゃおうかしら」

寵姫が帰ると、王妃はふと疑問を口にした。

「私、あのようなドレス持っていたかしら？」

全く記憶の片隅にも残っていない様子の王妃に、サーナは苦笑いしただけで何も答えなかった。

あのドレスは、結婚当初に王がせつせと贈って寄越したもののひとつなのだ。

この頃、王妃の鈍感さに、育て方を間違えたかもしれないと悩み始めているサーナである。

そして、あまりに報われはい王に対して、わずかなから同情を禁じえない。

その時、執務室で書類に埋もれている王がくしゃみをしたとかしなかったとか。

王妃に贈ったはずのドレスを寵姫の元で見つけ、王が悲しみに暮れ枕を涙で流したのは、また別の話である。

09 王妃と寵姫の楽しい毎日（後書き）

王さまが王妃さまに贈ったドレス。
すんごくお高いものです。

高い物贈るのに、似合う似合わないとかサイズを考えない男性……

10 王の決断（前書き）

お久しぶりでございます。

感想を下さった皆様、評価を下さった皆様、お気に入りに登録下さった皆様、本当にありがとうございます。

10 王の決断

そこは、淡い色彩の空間だった。

優しく温かな空気、陽の光がキラキラと輝き、王は眩しさに目を細めた。

白いモヤの合間から子供の笑い声が聞こえる。

「お父たまー」

ふいに右手が柔らかいものに掴まれた。見ると、可愛らしい幼子
が自分を見上げている。

戸惑っていると、その幼子は王の手を握ったままヨタヨタと歩き
始めた。

その覚束ない足取りに、思わず幼子を抱き上げるとキャツキャと
笑いながら、王の髪を引っ張っている。

幼子の頭を撫で、王は視界の悪い空間を、ただ真っ直ぐに進んだ。
しばらくすると、前方に複数の影が見え始めた。

「お母たまー」

「まあ、お父さまを呼んで来てくれたの？」

幼子は王の腕の中からもがき出ると、危うげな足取りで走り出す。
危ない、王が手を伸ばした瞬間、淡い色彩の空間は弾け飛んだ。

はっと王が顔を上げると、そこには見慣れた丸顔があった。

「……か、陛下？」

数回瞬きをすると、丸顔こと副宰相がわずかにこちらに身を乗り

出していた。

そういえば、定例議会の真つ最中ではなかったか。

どうやら一瞬うたた寝をしていたらしい。

素早く周囲に目をやれば、誰も王のうたた寝には気づかぬ様子で、西街道の盗賊被害の報告が行われていた。

「お疲れでございますか？」

そつと副宰相が王の顔色を伺いながら囁く。

「大事ない。少々寝不足なだけだ」

王はすぐに姿勢を正し報告に耳を傾けているが、その声に覇気は無く、目の下にはうつすらと隈が浮かんでいる。

疲労の色濃い王を、副宰相は心配気に見つめていた。

例年秋から年末にかけて王宮は猫の手も借りたいほど忙しくなる。豊穰祭と舞踏会の準備、年末調整、新年の準備と一年で最も忙しい時期なのだ。

それに加え、今年はリダ国大使の訪問、西街道の盗賊被害、その上貴族たちの縁談攻めが重なり、王の疲労は極限に達している。

「……というわけで、どうも盗賊はユパーナ人である可能性が高いようであります」

軍の担当者はそこで一旦言葉を切った。ざわめく議会を見渡し、驚きに声を上げる人々に頷いて見せる。

「ユパーナ人だと？ 国境を抜け入り込んでいるというのか」

一人の大臣の言葉に、そうだと多くの者が反応した。

西の国境は確かにユパーナと接している。

国境は見渡す限りの荒野の中にあり、警備は特に厳しい。一定区

間に置かれた皆と、毎日の巡回が厳しく国境を見張っている。

王妃との婚姻以来、両国の国交は盛んになったとはいえ、ジグジアを訪れるユパーナ人の多くは商人や裕福な旅行者たちであった。彼らは国境検問所を通り、入国許可証を得て国境を越える。その身元は確かで、盗賊のようなゴロツキが潜り込めるはずも、もちろん不法入国することも難しい。

「本当にユパーナ人なのか？」

この日始めて、王は発言した。

どうにも腑に落ちない。王の眉間に深くシワが寄る。

「被害者は、盗賊はユパーナの衣装をまとい、顔は布で隠していたようですが、見えた肌は浅黒かったと証言しているようです」「……そうか。で、西方軍も兵を出しているのだろう。まだ捕まらないのか？」

「は、残念ながら。盗賊は予想以上に人数が多く、さらに西方軍は人事不足でありまして探索に割ける余裕が無いようです」

王の眉間にさらに深くシワが刻まれる。それを見た軍担当者が慌てて続けた。

「陛下。中央軍から援軍を割くことをご許可願います。若い兵士の中に自ら志願する者が多くおりますので」

「なるほど、それは助かる。では許可しよう。準備が出来次第西へ向かってくれ」

ジグジア国とユパーナ国は長年国境を挟んで小競り合いを続けていた、いわゆる敵国同士であった。

それが、王妃との婚姻を機にジグジアの同盟国という名の属国となったユパーナには、現状に納得出来ぬ者も多いだろう。

従って、西街道の盗賊がユパーナ人である可能性もあるにはある

が、どうにも怪しい。？

まあ、捕まえてみれば分かることだ。

そうだ、くれぐれも王妃の耳には入らぬようにしなくては。

王は、積極的に民と交流を深めようとしている王妃を想った。

ユパーナ人とジグジア人の民族の垣根を取り払いたいのだろう。

そんな健気な王妃が今回の事件を知れば、どれほど悲しむであろうか。

一刻も早く解決し、王妃の笑顔を曇らせることがあってはならない。

王妃の笑顔を思い出しながら意味もなく資料をめくっている、いつの間にか議題が流れ、ホラスト元大臣が立ち上がっていた。

「えー私めからは、今日こそは陛下に新たな妃を迎えていただきました
くー」

その瞬間、議会は騒然となった。

貴族や役人たちは、皆同じ思いを持っていたが、明らかに乗り気でない王を恐れ、今まで誰も定例議会での議題を持ち出したことは無かったのだ。

副宰相はその時、王の手の中で真つ二つに折れ、天井へと飛んで行くペンを見た。

「……というわけで、早急なるお世継の誕生が望まれるわけでございますが。かくいう私めにも年頃の娘が三人ほどございます。いえ

いえ、私の娘を妃になどと滅相もございません。ただ、妃になり得る娘は国中に五万とございます。諸外国からの縁談も含めると、それは膨大な数に。陛下、なにとぞ、なにとぞ我がジグジア国の未来のためにご決断下さいませ」

ホラスト元大臣の長い演説が終わると、貴族たちが一斉に立ち上がり、王へと詰め寄った。

「陛下！！我が娘の姿絵は拝見していただけたでしょうか？！」

「陛下！！我が娘は社交界でも評判の美少女で」

「ふんっ。お主の娘なんぞ化粧が濃いだけではないかっ」

「何を無礼なっ。そちの娘など社交界嫌いの根暗ブスと評判だろう！」

「はっ。色気過剰女より、聡明な娘の方が妃にはふさわしいのだ！」

「いいからお前らどけ！陛下、一度娘にお目通りの機会を――」

「あ、抜け駆けするでないっ」

「陛下、我が娘の方が」

「いえ、我が娘の方が」

「陛下あー」

詰め寄る貴族に議会は混乱し、王は近衛たちに囲まれ命からがら脱出に成功した。

くそっ、ホラスト元大臣めっ！！

あの男一体何のつもりだ！？あのような議題は予定に無かったというに――！！

これがヤツの政治戦略なのか？！

あのように貴族たちが詰め寄り強制終了されなければ、王は議会という正式な場で決定を下さなければならなかっただろう。

荒い息を吐きながら、とりあえず居室に戻って来た王は、重い衣装を脱ぎ捨てると寝台に倒れ伏した。

最近、胃痛どころか頭痛や倦怠感にも悩まされている王である。このまま少し眠ろうかと考えていると、エドワードが薬湯を持ってきた。

「陛下。お休みになられるなら、その前にこれを」

紫色のドロつとした液体に顔をしかめたが、飲み干した王の顔色はなんと一瞬で明るくなった。

「なんだ、胃痛と頭痛が治り体が軽くなったぞ」

エドワードはただ満足そうに微笑んだ。

とてもじゃないが言えない。海を越え他大陸から持ち込まれたという怪しいことこの上ないミイラが原材料などと……。

「しばらく人払いいたしましょう。ゆつくり休まれて下さい」

「ああ、すまない。……それより、今日のことは聞いたか？」

エドワードは頷いた。

「ヤツのせいで、今まで以上にあからさまな貴族どもが増えるだろう。どうすれば大人しくさせられるものか……」

王は心の底から深いため息をつくが、エドワードはそれを払い飛ばして言い切った。

「そんな簡単なこと。王妃さまかご寵姫さまに、お世継ぎをお産みいただければよろしいではありませんか」

王は、さらに深くため息をついた。そんなこと、王にも分かっている。

だが、これには簡単には行かない理由があるのだ。

まず、第一王子を産むのは王妃でなくてはならない。

王妃以外の妃が第一王子を設ければ、後々争いの元になる可能性があるからだ。

しかし、王は王妃と交わした婚姻契約で「王妃が望まない限り子は作らない」としてしまっている。

このまま契約通りに王妃とは偽装夫婦を演じるならば良い。しかし、王の心はそれでは満足出来なくなってしまったのだ。

王は、当初のように寵姫だけを愛せない己を自覚している。

変わらず寵姫を大事に思いながらも、王妃も手に入れたいと本能が疼いていた。

王妃との子も欲しい、だが王妃には簡単に手が出せない。

世継ぎは早急に必要だ、だが第一王子は王妃の子でなければならぬ。

自業自得ここに極めり。

己で作った鎖にがんじがらめにされ、さらに首を絞められている。

「またそんな簡単なこと。王妃さまにお願いして契約を破棄させていただければ良いではありませんか。その上できちんと想いを伝えるのです。人間関係の基本です」

エドワードがさすがに呆れたように投げやりに手を振った。

「寵姫一人を愛し抜くと誓ったならやり遂げてみせなさい」「自業自得なんだから諦めたらどうですか？」などとは、最早言うことすら馬鹿らしい。

王はエドワードの言葉に晴天の霹靂のような衝撃に襲われていた。想いを伝える？！そういえば、王妃に愛を囁いたことなどあっただろうか。いや、無い。

いつも麗しい王妃を前にすると、何も言葉が出なくなってしまうのだ。

そうだな、人間関係の基本は相互理解だ。

いい歳をした男が、今さら照れるなど情けない。

その時ふいに、王の脳裏に議会中のうたた寝で見た夢が甦った。可愛らしい幼子が、自分を「お父たま」と呼んでいた。

夢の最後に出てきた「お母たま」の声は、そういえば王妃に似ていたような気がしないか。

まさか、正夢なのだろうか。

王の中にムクムクと根拠のない希望と自信が沸き起こった。

そうだ、未来は明るいはずだ。

王妃に想いを伝え、きつと子を産んでもらおう！

これで貴族どもも大人しくなるはずだ。

王は疲労も忘れ、王妃への愛の告白の筋書きに取り組んだ。

それは、人には見せられないほど甘ったるく、ご都合主義の塊の駄作であったが。

久方ぶりの穏やかな眠り中で、王は再びあの幼子に「お父たまー」と呼ばれ幸福を噛み締めていた。

この決断が、己を不幸のドン底に突き落とすとも知らずに……

10 王の決断（後書き）

後の世で王さま作の「愛の筋書き」はどこからか出版され、ベストセラーに。

11 王妃のお悩み相談室（前書き）

またまたお久しぶりです。そして明けましておめでとうございます。中々更新が進みませんが、どうぞ読んでいただければ幸いです。

11 王妃のお悩み相談室

爽やかな秋晴れの午後、東の庭園には今日も王妃と寵姫の姿があった。

王妃は白い毛の塊にしか見えない小さな生き物を抱き上げると、そつと膝の上に乗せた。

ピクピクと鼻をひくつかせ、長い耳をピンと立てる仕草が可愛すぎてたまらない。

「そんなに可愛いならシェイラも飼えばいいのに」

「ええ、そうなんですけど。私、猫は育てたことがあるのですが、兎さんは初めてなので」

膝の上で丸まっている兎の頭を撫でながら、王妃は身悶えるようにため息を漏らす。

大きな黒い目とホワホワの白い毛が特徴の殺人的な可愛らしさを持つチャーリーは、最近寵姫が飼い始めた兎である。

寵姫の侍女の実家で大量に繁殖してしまったものの一匹を引き取ったのだという。

すっかりチャーリーに骨抜きにされてしまった王妃は、時間のある限りチャーリーと過ごし、その愛を注ぎ込んでいる。

「聞ってる？ きつとまだ里親募集していると思うの」

「本当？ そうだわ、出来れば女の子がいいですね。チャーリーは男の子ですから」

王妃は大げさなほど喜んで笑顔を作る。

「聞いてみるわね」

微笑んで頷いた寵姫に王妃の瞳はわずかに揺れた。

ここ最近、どうも寵姫の様子がおかしい。
無意識にため息をつく回数が多く、食も細くなっている。何か悩みがあるに違いない。

チャーリーも、そんな寵姫を心配した侍女が連れてきたのだろう。
実は王妃も寵姫が心配で、チャーリーをダシにして時間の許す限り
入り浸っていたのだ。

悩みがあるならば相談して欲しい。
しばらく待ち続けたが寵姫は口をつぐんだまま、とうとう我慢出来なくなつた王妃は今日こそ聞き出そうと決めていた。

ちらりとサーナに視線を送ると、サーナはすぐに他の侍女たちに
合図をし二人から離れて行く。何かあればすぐに駆けつけられる距離、
しかし会話は聞こえない場所まで下がってもらったのだ。

「シェイラ……」

寵姫は困つたように王妃の名を呼んだ。

「ごめんなさいアン。私、もう黙っていられません。一体何を悩んでいるのですか？」

大好きな寵姫のため、どんな悩みでもすぐに解決してあげたい。

「……ダメよ、シェイラにはとても相談出来ないわ」

泣きそうなほど弱い寵姫の言葉に、王妃は言葉を失った。

「どうしてですか?!」

とてもではないが納得できない。

「……シェイラのこと大好きよ……この関係を壊したくないの」

私だって、私だって。

「私だってアンのが大好きです！ アンより大切なものなどありません！」

「……でも、ダメなのよ」

涙を滲ませる寵姫の悲痛な表情に、珍しく王妃の脳裏で何かが弾けた。

ああ、そうか。

王妃は思わず浮かせていた腰を再び落とすと、寵姫の白い手を取り指先で優しく撫でた。

「陛下のことで、ですか？」

息を飲む寵姫に、王妃はことさら明るく笑って見せた。

実は、王妃と寵姫の間ではつきりと「婚姻契約」の話をした事はなかった。

王が「寵姫には説明してある」と言っていたので、王妃はあえて二人の友情の間にその存在を挟ませたくなかったからだ。

もしかしたら、寵姫は何かを誤解して捉えているのではないだろうか？ それで一人で思い悩んでしまったのだろうか？

そうであるとしたら私のせいだ。王妃は秘かに奥歯を噛み締めた。

「アンに伝えたことはありませんでしたが、陛下のことは良き友人として大切に思っています。でも、アンはかけがえの無い無二の存在です。私にとっては、陛下よりもアンの方が大切です」

涙を溜め瞳を見開く寵姫に、王妃は当然だと何度も頷いてみせた。

「陛下のことで、アンと私の関係が壊れてしまうなんてことあり得ません」

何故そのような恐ろしい事が起こりえようか。

もしそのような事態になれば、全身全霊を持って阻止してみせよう。

「だから何も気になさらないで。私に話して下さい」

寵姫は鈴蘭のごとく美しい美貌を曇らせ、そっと王妃の手を握り返した。

「……え、と。では、陛下の御心が私へ向いている、と？」

ゆつくりと言葉の意味を飲み下した王妃は、次いで思わず吹き出した。

「何を言っているのですか！ありえませんが、そのようなことっ」

ずっと握っていたままだった寵姫の手を振り回しながら体を折り曲げて笑い転げる王妃だったが、寵姫の沈んだ表情は動かない。

「ねえアン、本当につ、そのようなことはっ、決してっ」

あまりに突飛な悩みにしばらく笑いを止められなかった王妃だが、一向に晴れぬ寵姫の様子に我に返った。

ことの詳細を詳しく語れば、それは王妃が嫁ぎ、しばらくの後から違和感を感じていたらしい。

王妃との婚姻後、王は頻繁に体調不良を訴えていたが、初めは婚姻によって増えた煩雑な執務による疲労だと思っていた。

しかし、婚姻が落ち着いても一向に王の体調は回復せず、ますます酷くなるばかり。

そして徐々に供にいても上の空なことが増え、時折寵姫を見る瞳に罪悪感が浮かび出した。

もちろん新しい女性の影などあるはずもなく、けれども「王妃とはこのような婚姻契約を結んだ！これが私の誠意だ、アン」と言っ

て抱きしめてくれた王を信じていたのだが……。思いもかけず王妃と親しくなったその時、寵姫は「やはり」という思いを抱いてしまった。

そして、王妃の話を毎日複雑な表情で聞く王に、とうとう確信してしまったのだ。

けれど王妃と親しくなった寵姫は、王と王妃の板ばさみで苦しんでいる。

王妃はどのように寵姫の誤解を解こうかと必死に頭を動かした。ジグジアに嫁ぎ半年。王とは決まった日以外に会うことはほとんどなく、会っても昼間のわずかな時間のみだ。

話題も最近の生活のことや公務のことなどばかりで、寵姫が心配するような関係では決して無い。

王妃は王に対して好意を感じてはいる。

しかしそれは国や今の生活を与えてくれた恩人としての好意、表向きには夫という名の良き友人としての好意なのだ。

何より、王は寵姫を愛している。

「愛する女性はまだひとり」と、王妃に婚姻契約を突きつけたのは王なのだ。

王妃は『ジグジア国王とユパーナ国第十三王女との婚姻契約書』を正しくそらんじることが出来る。

なんと誠実で、愛情深く、素敵な男性だろうかと感心したものだ。あの時の王の挑戦的な瞳には、確かに寵姫への愛で溢れていた。

陛下がアンを裏切るなんて決して無いはず。

王妃は寵姫に届くよう、切々と王の愛情深さを語ってみせた。しかし寵姫の頑なな思い込みを訂正することは出来ず、その日は初めて何とも後味の悪い別れを経験したのだった。

とにかく一刻も早く寵姫の心を軽くしてあげなければ。

おそらく些細なすれ違いが重なり、誤解に繋がってしまったのだ
ろう。

男女の機微は繊細で複雑で難解なのだ。王宮内で流行している口
マンス小説でも良くある展開ではないか。

このような色恋沙汰で、寵姫との関係がぎくしゃくしてしまうこ
とは許せない。

涙に濡れているであろう寵姫を思い、王妃はその夜まんじりとも
せず夜明けを迎えた。

11 王妃のお悩み相談室（後書き）

ほんの思いつきで最近ハヤリのウサギさん登場です。「うさんぽ」
させてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1330o/>

王と王妃の婚姻契約

2011年1月18日23時42分発行